

「鳥取県中部地震記録誌」刊行に寄せて

鳥取県中部地震は、私が当院に赴任する半年前の出来事であった。当時の勤務先に転院搬送があると聞いただけで、病院には大きな被害はないと伝わってきた。少なくとも病院内で人災はなく、診療機能への影響は大きくないと聞いていた。平成29年4月に当院に赴任してきた。今でこそほとんど目につかなくなったが、民家の屋根の青いビニールシートが、あなどれない規模の地震であったことを語っていた。病院は確かに構造上の大きな被害はないように思えたが、耐震構造である病棟部分の外壁一部に小さな損傷があり、タイルが剥がれ始めているのに気づき急いで修復した。免震構造である外来・中央診療棟の内部も、壁の表面に小さな亀裂も散見され地震の爪痕と思われた。

中部地震直前に災害訓練を行ったと聞いている。自らの経験を糧にした地震後の訓練は年々臨場感のある質の高いものになってきた。当院は鳥取県中部の災害拠点病院であり、その役割を果たすためにも、万全とはいかないまでも地震への備えを更に充実したものになければならない。更に、当院は河川が複雑に隣接しており立地的に水害に対する対応力に大きな問題を抱えている。昨年夏に東日本を中心とした台風による大規模水害を目の当たりにし、全面建て替えが当面は困難な状況にあっても、水害への備えを根本から見直す必要性を痛感している。まずは非常時の電力確保の能力向上と止水を課題に具体的な協議と可能な施設整備を開始した。

インフラ整備が重要であるが最後の砦は人力と考える。その意味で当院にはDMA Tメンバーを中心に災害対応に極めて熱心な職員が多いことは大きな財産であり心強く感じている。今回、浜崎部長の熱い地元愛とDMA T統括責任者としての強い意向もあり、あの日の記録を残し今後の災害対応に役立てようと本誌の編纂に至った。同部長、資料の収集と整理に尽力された関係職員、本書の編纂に尽力された図書室の山本司書に感謝申し上げる。

令和2年3月

鳥取県立厚生病院長 皆川幸久

鳥取県中部地震を振り返って

2016年10月21日（金曜日）、14時07分頃、米子駅から鳥取大学附属病院に向かっていた私は、かなり強い揺れを感じた。まさかとは思ったが、鳥取県立厚生病院に連絡を取り、阿藤孝二郎副院長から状況の報告を手短に受け、初動対応をお願いした。

私は、つくづく地震に縁がない。00年10月の鳥取県西部地震の際には、横浜での日本癌学会総会に参加していた。

地震発生時、厚生病院では停電となり、直ちに自家発電に切り替え、手術は中止。本院の対応は早く、一階外来ホールに対策本部を設置、トリアージ態勢を組織して、15時前には多数の被災者を受け入れが可能となった。その後、公立豊岡病院、次いで県内3カ所の災害拠点病院からDMAT（災害派遣医療チーム）が到着。

万全な医療態勢を整えたが、幸いなことに、震災関連でトリアージを受けたのは軽症患者さん5人のみであり、翌日には解除した。なお、24日（月曜日）朝までに震災関連の受診者は22人で、骨折と脱水で2人が入院した。厚生病院での対応が困難な患者3人が他院に搬送された。その内訳は血液透析、食道静脈瘤破裂、大腿骨骨折である。

震災に対する医療態勢を迅速に立ち上げることが出来たのは、前年11月に実施した大規模な防災訓練の成果であった。訓練時と同じ部署、同じ任務に就くよう指示したのは吹野俊介中央手術センター長である。対策本部では浜崎尚文集中治療室長が的確な判断を下し、また、院外組織との連絡調整にあたった。全職員の努力と献身には今振り返っても、病院長として頭が下がる。

停電は地震発生後約1時間で復旧したが、断水およびボイラー停止22日まで継続した。このため、厨房の機能が停止して、7回の患者食は院内備蓄の非常食（4回）と市販業者の弁当（3回）で凌いだ。

病院内の状況が落ち着いた23日（日曜日）の午前中には対策本部を5階の大会議室に移動。午後には私と阿藤副院長、戸田看護局長の3名で各病棟を回診し、すべての患者さんが落ち着いて療養されていることを確認、24日朝から通常の業務態勢に戻すことを決定した。

反省点もある。朝夕には幹部会と各部門の代表者会議（約40人）を行い、不要不急の面会制限、手術や分娩に関しては現場の判断を尊重、院内インフラの回復状況報告など、指示の徹底と情報の共有を計った。500人を超す職員全員に情報を徹底することは難しい。情報に関しては職員間で濃淡が生じた。

地震発生後、本院では何故か分娩件数が増加した。3日間で9件である。全例、母子ともに健康であり、安堵したが、お祝い膳が提供できなかったことは心残りである。

地震から一週間、病院機能は完全復旧したが、幹部職員（医師、事務職）の当直は継続していた。その後、危惧していた感染症や避難後に死亡する「震災関連死」の発生はなかった。

地震発生直後からご支援、ご助言いただいた鳥取県病院局、地元医師会、鳥取大学附属病院、DMATなどの皆様には、ここに記して、改めて御礼申しあげる次第です。

令和2年3月

鳥取県立厚生病院 前院長 井藤久雄
(現 社会医療法人千秋会 井野口病院 院長)

目次

巻頭言・寄稿	1
第1章 地震対応の概要	5
鳥取県中部地震の概要(新聞掲載記事)	
I. 各部署の状況と対応	11
①外来 ②会計 ③中央放射線室 ④検査室 ⑤理学療法室 ⑥手術室 ⑦分娩室 ⑧透析室 ⑨病棟 ⑩エレベーター ⑪厨房 ⑫ボイラー室 ⑬保育室 ⑭図書室 ⑮清掃業者	
II. 災害対策本部設置と災害対応	15
①本部長 ②職員配備 ③情報 ④院外対応 ⑤安全 ⑥診療 ⑦診療支援 ⑧家族支援 ⑨医事 ⑩設備支援 ⑪DMAT 活動拠点本部	
III. 小括	26
第2章 当院職員の初動対応調査	27
IV. 当院職員の初動対応調査	28
V. 考察	35
VI. 結語	42
VII. アンケート自由記載内容詳細	43
編集後記	64